日本近代文學研究會編集

# 現代日本小說大系

第二卷

河出書房版

現代日本小說大系（重製）
改定 定價 弐百參拾円
地方賣價 弐百四拾円
河出書房

昭和二十五年一月一日初版印刷
昭和二十五年一月五日初版發行

著者 尾崎紅葉
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
發行者 河出孝雄
東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會
編集者 片岡良一
横濱市中區鶴澤二九番地
印刷者 赤尾幸一郎

發行所 東京都千代田區神田小川町三ノ八 株式會社 河出書房
會員番號A一一一〇一四番
電話神田(25)三一七四番

現代日本小說大系 第二卷

# 目次

## 尾崎紅葉

三人妻……四
心の闇……一四一
多情多恨……一七五
解説（片岡良一）……三五九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

尾崎紅葉

三人妻
心の闇
多情多恨

# 三人妻

## （前篇）

### （一）錢の富士

あるやうで無いものを金錢とて、天下の人の寐言にまでいうて欲しがらざるはなし。信に此金錢の獲難きことの不思議さは、鐵を吸ふには奇妙、磁石といふ神通力あるに、此は何したものと、金時計買ふ人の後に、過難に立てる納豆賣の獨語道理の至なり。

此物羨みの男とて、母の胎内を苟入にて轉げ出し、臍の緒に絲を牽きしにもあらざるべく、二十四五の頃には隨分百兩包の顔も見て、其重寶なる味をも知りけらし。

羨まるゝ男とて身内に金脉のあるにはあらず、由來を聞けば孰れか額の汗の滴れて、粒々金色の御光を放つにあらざるべき。

失ひ易しと思ふ方の金錢は、皆獲難しと念ふ人の手に落ちて、あるやうで無いものとはいひながら、在る所にはまた腐るほど在るもの哉、今此日本に葛城餘五郎といふ名を知らざるものなし。

此男の持てる資産を、盡く一錢銅貨に換へて聯ぬる時は、恐るべし日本國を五卷半捲きて、其餘れる分を積重ねて見れば、富士山の高さの六層倍、と入らざる事を統計家の傳へ侍る。

これが一人の寶なり。念へば裏借屋の奥に家内五人暮し、夕暮になれば文久四ッ殘る日を、一年中の安樂日として、朝は芋の尾を粥に啜り、午餉は大方拔にして、晩が南京米の雜炊といへる輩の、天から授けられたる配當を、優勝劣敗の理にやられて、かゝる人の弗箱に吸ひ取られ、旨くした男は神か國王かの如く振舞ふに、下根弱肉の大勢動物館の山犬ほども食うた例無くて世を送りぬ。

萬國何方にも無慾の人といふは無ければ、金錢の置場に當惑して、竹筩に懸け箕に入れて、之を大道に捨つるものゝあるべきやうはなきに、何處いかなる所にて、餘五郎はさほどの蔓を見出して儲けたるぞ。手を三ッ鳴せば忽然として千圓札の降ッて來る奇術を得たるものならむ、と餘りの訝しさに素生を糺せば、加州金澤在談義所といふ村に、鳴

るは瀧の水日は照れども、絶えず陰のごとく幽けき土百姓の次男に生れけるが、天性の利發土なぶりを憂き事に思ひ、十七の年國元を逐電して江戸にさまよひ、一二年は便る方なさに乞食の眞似もして、それからの出世の小口、湯屋の木拾に成りて、人の中なる溝鼠、之もおもしろからず。頓て蕎麥屋の擔手に入込みて、少時働きける中に、始めて眼孔の木眼ならぬ人に見出されぬ。それは大原富五郎とて流離の鑛山師なりし。

餘五郎其時二十四なりしが、機敏鬼神の再生、と大富も舌を巻きて手足の如く賴めば、餘五郎も此奴骨ありと服して勤めける程に、立身衆に抽えて、一年の間に世智賢きものばかり聚めたる二三十人の上席にすわり、大原組の一番番頭餘五郎の下に樣の字を附けられ、會ふものゝ首は先方から下りぬ。其中には四五年前には、附くな〳〵と袂を振りし旦那樣もあるべし。

餘五郎二十八の年、大富一生に唯一度の見込違ひより、見事に身代を叩き、借財忽ち山のごとく、之に心挫けて勇しき了簡の失せけるを、芥子の膽と餘五郎心に賴もしからず、言葉を盡して勵せども肯かず。此蹉跌が病の源となりて、間も無く大富は亡くなりけり。

其後は餘五郎鑛山に限らず、どかりと儲かるほどの事には、先鞭に首を入れて逸す事なかりしに、折々の些細の損は、一度の大儲に埋合せて、次第に仕出しける上、明治維新の紛擾に紛れ、爲たい三昧の甘い事して、一網に五六萬の利益は、其折わづか十五兩で買置きたる地面の、泰平になりてから暴に二千圓になりけるなど、さる類の多かりし。

明治の世となりて萬事に歐羅巴を寫す氣運に伴れ、舶來の儲口潮のごとく、滔々と寄せ來るを此時と、世間は成らぬ事に念へる三千里の荒海を押渡り、日本にては一錢に十個するほどのものを、珍らしがる毛唐人に五弗十弗に賣りて、又其邦の下らぬ物を買集め、持還りて都人の心を動かし、之にても亦算盤の外の利益。唯奪たも同じ樣なる手易さに、金錢が金錢を招ぶとは此事なり。

それより類異れる商社を四ッまで立てゝ、股肱の才物に預け、其外拔目なく八方へ手を擴げて、四天王に麾を取らせ、自家は風流無慾の顏して、都外の閑靜なる處に、華族かと人にいはるゝ居宅を構へ、其四邊の地面は、眼の及ぶ限り我垣の内にして、庭に追剝の出でしと噂されけり。

商業の事は一切手代委せにして、我は有金を我一代に費ふべき工夫に、屈托してゐる事と誰も想ひけるに、此身代になりても更に滿足する事なく、箸の上下にも錢儲に肝膽を碎き、之はと思ふ計畫浮べば、酒盃を投捨てゝ馬車を急がせ、腹心の手代に計を含め、唯二三日の中に、人間一四

二代は懐手しても、樂に暮しのなるほどの商ひすれば、如何樣道理と、世間は餘五郎が大抵の贅澤に驚かず。東京間近の名所々々には、葛城が別宅の瓦屋根を見ざる事なし。ある夜の醉紛れに、泉水の月を觀めて、此景色の好さ、我は未だ須磨の秋といふものを知らず。人の話に虎誕なくば、いつぞは見たいものといへば、御招伴に正座りたる男、此御庭先より鐵道を布き、風呂場、料理場、お寢間、お坐敷附の瀧車を造らせ、お浴衣のまゝづいと御出は什麼。餘人は知らず御前の力なれば、譯も無い事といひしは、追從なれども其ほどの金力は確にある身分にて、其もをかしからぬにあらねど、今というても今の間には合ひ難し。早い所は須磨の寫眞を買はせ、此月の前にて見たらば、興は薄かるべきも亦變りて旨い分別ではあるまいかと笑ひぬ。かの男聞きて、あの心懸にては此身代當分は傾き難しと陰言をいひし。

乞食までせし金澤在の土百姓、商業に懸けては豐太閤の弟分なり。亂世ならば隨分天下も取りかねまじき器量。一は運といひながら、眞似のならぬ事なり。其昔蕎麥屋の擔夫せし折は、容貌何處か狸のごとく、人は狸餘といひ囃して、此行末を思ひ懸くるものは無かりしが、今は二頭立の馬車を軋らせ、獵虎の皮の膝懸、白鶴の羽織の敷物に、悠然として薫らす葉卷の灰の、風に飛ぶ一片が何錢といふ身にならば、狸のやうなる御顏も可笑氣無くなりて、頤髯、八字髭、尙又縮れたる頭髮までが威儀の飾となりて、彼は葛城といはるれば、知らぬ人も畏しがりて、いかさま尋常ならぬ面魂と皆見送りぬ。

同車は束髮の白襟紋服の女なり。年の頃四十約なるが、瘦乾びたる容貌の中に、剛としたる處と凄まじき氣色のあるは、柳の大木の秋に遇ひて、葉を振ひたらむ風情なり。加之下司なる處ありて、奧樣の胴に遣手抔の首をすげかへたらば、かくやと想はせぬ。此女廝子とて餘五郎の妻なり。おぼろ氣に昔を知れるものゝ語るを聞きしに、湯島天神の境內に、其頃名代なりし矢場女のよし。

今は燒消して灸の痕のみなるが、始めは左の腕に蜘蛛の肉繡ありて、蜘蛛のお重と異名とりし手練ものゝ、網にかゝる男は羽交縛になりて血を吸はれざるはなかりし。

今の葛城大盡、その頃の狸の餘五郎、尻切半天に馬のやうなる脚を露して、逢はで還れぼと通ひけるに、嚙みさしの小楊枝も吐懸けまじき素寒貧に先方から熱くなりて、行くたびごとに小使を拈り、上に引張るものから下帶までも仕送りぬ。

漂母の一飯立身の種となりて、今も餘五郎に捨てられず、奧樣と崇められて協はざる望も無く、千兩役者の三四人も家に呼びて、地聲で世事をいはるゝやうになりては、世の

中もをかしからずと、悟りすまして浮きたる事を慣み、無法の華美を好まず、人に昔を知られぬやうに、夫の名を瀆さぬやうにと殊勝の志を起して、何處までも生れからの奥樣に振舞ひ、萬事を鷹揚にして、情を深く下を愍めば、誰もころりとやられて、此奥樣なくては葛城の家は闇夜の月、光る眼玉も恐がられず、出入の男女生神のごとく敬ひ奉る。

## (二)　天邊の樂

衣食住は人の心を苦めて、此中一ッの不足も煩ひの種となりて、三者具足の願ひばかりに、大方の不性者も、否々ながら手足を動かし、少し活潑なるは身を粉に碎くべかし。頓て此三者の足れるといふに、あらでも、纒に餘裕のつく頃よりは、又外の慾出でゝ、養氣といふ事を念出し、無理なる工面もして折々は命の洗濯。世の男心の天邊の樂み、女色の外にあらざるごとし。連添ふ女天邊の苦勞も、亦我男の浮氣なるべし。

熟々惟るに、建國の始めには民尙武の氣に富み、刀鎗を野邊の白茅ほどに思ひ做し、生首を見ること西瓜のごとく、女までが人の血汐を唇に塗りて化粧せしほどのあらくれたる國も、數百年の間に驚くべく進化して、髯ある奴が白粉傅けて姿に氣を揉み、華車な事の穿鑿を第一にして、千萬の遊戯に精を竭し、骨を休め氣を養ふ事のみを考へ、今世界に開化せるといふ國々の有樣を見るに、どうやら大きなる玩具箱のごとし。

その代りには太古より數百段賢くなりて、勤むる所は屹度勤めて、錢儲もおろかならず、おのれの一分は立てゝの後の洒落なれば、之を嗤ふものはあらざれど、可成は此性根にて祖先建國の始末をおもひ、黑木の柱、木葉衣、鳥獸の肉の摸倣にて行かば一入好かるべきに、さうは行かぬ理のありてや、萬國何方も開化の國の贅澤、言語に盡し難く、我邦の人々曾て夢にも見ざる事多し。

一人の身の上も一國に異らず。壯年刻苦の善根より、美果累々と實りて、衣食住に事缺かず、裏には土藏二十戸前、日本橋から眺めたやうな景色。他人の物と見てさへ胸の清くほど快氣持なるを、悉皆貴下の物と耳端に囁く聲して、之ばかりにても十分なるに、まだ外に鑛山幾箇、地面何百箇所、繁昌なる商社を數持ちて、招かざるに來る金利ばかりが月々何千圓。出來も出來たる長者の心には、おのづから乞食の昔忘れて、分相應の榮耀は我からせずとも世間が許さず。爲て見るほど面白くなりて、金でなるほどの歡樂の數々、一順仕盡して見れば、兎角自由の利くは無理なる處ありて、興の薄きが本意無く、金力ではどうにもならぬやうな遊はあるまいか、と髭を撚りて、麻子の横顏に

新橋の酒の氣を吹懸くれば、打笑ひて、何事も苦き中のおもしろさ。湯島に在し頃、正月三日の雪の夜に、此方は地廻り六七人に打擊かれ、命も危かりし中へ蜘蛛のお重が飛込み、私の大事の男をと泰平樂をならべし時、見物の中より狸の助六と聲を懸けられしやうな、面白き事は此後またとはあるまじといへば、餘五郎額を撫でゝ、過去りし昔はいふな〳〵と寢床へ遁入りぬ。

山瀨といふ手代は開ゆる粹者、之に思はくを話せば、當時柳橋に柳屋の才藏といふものあり。姿色万人に秀でゝ心慧く、諸藝に堪能にして、應待の上手此上無し。年齡は二十一の由なれども、打見は十八九を越えず。之を雛段の上に置くならば、誰も「者」とは思ふまじき上品さ。水を向けて口を開かせなば、いやはや辯舌滔々として前なる河も逆に流るべし。

此女を聘でのおもしろさ、肉も骨もあつたものにあらず、大佛樣も蕩けて流れて柳屋の金錢の泉、晝夜を舍てぬ坐敷のせはしさ。美人品切れの當節柄、客はいづれも餓鬼のごとく、眼色を變へて影隨ひ、我手に入れむと、金錢を吝まず、名を惜まず、顏を潰し、命を捨てゝ懸かれど、木像の普賢菩薩か、繪にかける小野の小町よりも、舌頭の甘いだけ面憎く言ふ事聞かず。何の某といふ待合の女將軍も麾を投げて、此子帶留の金具に珊瑚の飄簞を附けたる間は、到底轉ばじと酒落たり。

まことに浮氣ならぬ深間ありて、さる會社の卑き所を勤むる、菊住何とやらいふ男に情立て、古風の誓文お前一人の中と聞き及ぶ。人の噂に違はず、此女の手剛さ。我等も見事に彈かれたる一人なれど、委細を申さば色男の名折、概畧はかくの通り。兎にも角にも一鞍御試しあるべし。先は金轡にては行かぬ代物、近頃御徒然の折から變りたる御戲みと語るに、葛城大盡勇み立ちて、これより直に案内せよと急かれ、用ある身なれど何も主命と是非なく、荒氣の大將一戰に仕損じて、同席に恥辱掻くも辛し、手際を見るもをかしかるべし、と後に尾きて立出づれば、白拍子などへ通はむに馬車は勿躰臭くして風流ならず、綱引で宙を飛ばすべし。

## (三) 沈香亭

萬端山瀨が取計らひ、葛城大盡は白檀の床柱に倚れて、鷹揚に頤髯撫づる指の金剛石、座敷の前後十二疊を照らすを、番の下婢が噪ぎて一同に注進すれば、板前の傳吉まで飛出して後學の爲、と隙見する人數隣座敷の襖の陰に山を成し、儆めども足音人聲の聞こゆるを、何かあるかと大盡に咎められて、御前に侍へる下婢は挨拶に困り、唯今彼方に參りし役者の歸る所と紛らせば、其方も見て來いと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の仰せになほ困りぬ。

一時間ばかり待てども才藏は見えず。長いの、と大盡酒の旨うなさゝうな顏色。今一度見て參れの御意なき內、下婢は心得て、他のお座敷を貰て參るやう申遣はしましたれば、少々暇取れまする理、おッつけ見えませうほどに、少時御辛抱遊ばされまし。なほ迎ひを遣はしましよと銚子を以て立ちけるが、頓て還りて、やう〳〵只今見えました。

強い勿躰の待たせた罰には、座にも着かせず一嘲弄して、其舌戰の摸樣を御前の御看に、と山瀨は酒に舌を濕して待つ所へ、才藏晝間からの無理酒に傷みて、歩行ふら〳〵と次第なき態度。海棠しどろに雨を帶びて、春色今を闌なる姿、沈香亭の圖を歌麿が書いたらばこんなものなるべし。

袖を牽かれて拂ひし人のありとは心着かず、二人を一樣に初對面の時誼して、風俗一目に位あるべき御方と、三指懸りに挨拶するを、山瀨は心に可笑く、才藏が面を擡ぐるを伺ひ、其方は見忘れても、此方は遺恨ありて忘られぬ御方へと盃させば、これは〳〵忘れては濟まざる御方を、此通りの躰裁、何事も酒の上と堪忍遊ばさるべしを發端に坐敷浮き出して、馴染無き大盡も頗る興に入りて、てんと堪らず。十二時近くなれども歸るとは御意遊ばされず、折々目顏にての合圖、山瀨は確に其事と合點はしたれど、到底成らぬ相談と知れば、左右なくは打て出でず。打て出づれば取て投げらるゝは眼に見えても、賴まれた因果には否もいへず。さらぬ氣色して冗談口を吐きてありけるが、折を見合はせ下座敷へ呼出せば、山瀨樣鏘助樣への御傳言か。柳橋中に知らぬものなき戀中を、深罪くも隱立とて、薄闇い處へ我を招込までも、天下晴れてから〳〵と、立派に傳言を賴むだがようござんす、と早一義を言出させぬ仕掛なり。

山瀨もさるもの、こんな古手には少しも騷がず。山瀨といふ男自分の戀に人を賴むは大嫌ひ。さればいつぞやも其ゆゑにこそ振られたれ。坐敷にござるは此方の主人といへば、其で承知の理の葛城餘五郎。格別冗い事をいはずとも、此方に用とは知れきつた譯、と半分聞きて其だけはと早立ちかゝる。

引留めて、下に居やれと、何處かの三味線を合方にして染々口說ば、立聞く女もあらば其が第一靡くべき上手に、才藏も持餘して、遁るゝ路なく、申すは家暮なれど、男には一切肌觸れぬ心願ありてと、しやう事なさに秘したき事を匂はすれば、其も知らぬにあらねど、心からの浮氣にあらぬ、勤めの餘義なさに其人も定めてゆるさるべし。今まで轉ばぬを看板に賣出したる名の、唯一夜にて折れむことを口惜く思はゞ、其回復のなるほどの事は、屹度山

瀨が命に懸けてもすべし、と第一金第二金第三金第四金の奥の手で行けど、吭も鳴らさず。冥加に餘る御志は嬉しけれど、私に彼人あるを御存じなればなほの事、貴下にも覺のある御身にて、他の戀ならば壞しても苦しからぬやうなお言葉は、近頃粹にも似合はぬお心意氣。

一言唯といへば今の間に德の行く話、私とて慾を知らぬではなけれど、其に背中向けて思ふ人に心中立てるが、ちと當世に向かぬかは知らねど、張とやら意地とやら、そんな愚似して何になる、と若い了簡を嗤うて下されな。

相手は流聲の葛城樣、紅襟の慾氣少なき子達でも、此方から强賣する氣になるほどのお方を、醉興らしく振るといふも、申す通りの次第なれば、何卒お心に障られず、御前へよしなに貴下から、と酒を醒ましての言譯に、此上はとて鷄を殺るやうな手暴もならず、請賃無しで澤山聞され、用も足ずに此まゝ手を退く器量の惡さ、と山瀨は苦笑して立上りぬ。

取り殘されたる葛城大盡下婢の酌に寂しき小飲して、相談の暇取るは事の難かしきか、但は聞ゆる悍强を山瀨が乘鎭めに懸れる故か、と然までは退屈もせず、半分は樂みにして待けるに、裏階子より足音して山瀨はぬつと入來り、案の如くといふ冒頭に力落して、不成かと顏を差寄すれば、とても〳〵と首を掉りて、不肖の力には及ばず。此次には自身御出馬ありて、一攻攻めて御覽あるべし。今宵は兎も角も此儘御歸りと勸むれば、大盡梓弓の張つめたる弦斷れて、くるりと撚れて復りたらむやう味に氣が拔けながら、未練殘りて才藏はいかゞせし。唯今參るべしといへば、左樣かと落着拂うて、更に御腰は動がず、今一目御覽じたき風情なり。

山瀨は羽織の紐を結び懸け、早御歸館あるべし。此處でまた酒にしては、此方も照れゝば女も照れ、殊の外場合の宜しからぬものなり。女の急に參らぬも、其邊を計らうての事なれば、此處はいざ〳〵御立と急かれて、大盡いよ〳〵本意なく、さればとて一騎殘りても功名の成難きを見極め、しぶ〳〵歸支度する所へ、素知らぬ顏して才藏出來り、小取廻しに大盡の後より外套着せ懸け、帽子手袋を持ちて、離れがたなきやうに跡を追ひまはし、近日に是非。今夜は飲過にて失禮のみ、と今方振つた顏もせぬ挨拶。愛嬌滴るゝばかりの眼元を大盡屹と視て、近日日語に來るぞ、と戲れの中に執念あるやうな言をいへば、彈器仕掛の胴懸して屹度お待ち申しまする、と之は眞實の中に嘘あるやうな口上を、憎しと山瀨が側から、胴懸よりは此方の心が彈器仕掛、好具合に出來た藝妓めと肩をたゝけば、才藏も一言なくて、とんと山瀨を式臺へ突落しぬ。

茶屋の女房始め七八人の下婢ども見送りに居並びたるが、

此恭にさゞめくを木の頭、御客樣車に乘移れば、綱引提灯を振立てゝ、がら〳〵と引出だす後に、御機嫌ようの聲々も鎭りて、門の燈火の幽なるを、車小橋を渡る時大盡迢に眺めやりて、思ひなほ殘る顏に川風吹きて、醉心涼しくなるまゝ半睡むと思ける間に、我門近き道端の小石に車搖れて眼覺めぬ。

後を見れば續く車無し。如何せしぞと車夫に問へば、明朝用事あれば此所にて御別れ申すと申上げよとて、途中より曲られましたといふ。

大盡臥戸に入る頃酒醒際にて、水二三盃に胸淸き、睡氣は洗ふごとくなくなれば、才藏の姿心に浮びて此儘に捨難く、幾度の反側に思案しかへて、手に入るゝ工夫せしに、屈めたる足を思はず踏伸し、扨あるわ。之を山瀨に聞せたらば、それぞ上策と雀躍すべし。とかく韓信は彼の事、此謀計を受けて働かさば、万に一ッも仕損じはあるまじ、と獨り悅に入りて、安心からやう〳〵睡氣さし、枕頭に喚ぶ聲に驚されて、何ぞと半眼に四邊を見廻せば、窓帷の紅色に日影皎々と、軒なる音呼の羽搏手に取るごとく、最早何時と大欠すれば、侍女畏りて、十一時でござりまする。唯今山瀨樣が見えられました。お風呂が沸きましたれば直にお召し遊ばしまし。

むく〳〵と起出で、一風呂浴びて表座敷に出づれば、山瀨は睡むさうにもなき顏色にて今朝二件ばかり用を足して參りたりとは、有難き心懸に對して、いつも愧しき次第なれど、昨夜は寢ずに妙計を案じたり。附ては又盡力賴まねばならぬといへば、山瀨はから〳〵と高笑ひして、二度有る事は三度有る例。また失敗でござるかな。昨夜は隨分死物狂になりて力めたる苦戰の模樣、御笑草までに御聽き下されたし。なるほど其を肴に一杯と、侍女を呼びて用意を申付くれば、大盡日頃の大短氣、何事も速くなくては御不機嫌に懲りたる家內が技倆の凄さ、左慈が松江の鱸魚を鉢から釣上げたほどゝ、始めての客は誰も驚入る酒肴の支度、珍膳五十人前も咄嗟の中に調ふは此家一の名物なりとかや。美しき侍女二人膳を運びて、一人は御酌に控へ、一人は通ひを勤めぬ。用あらば呼ぶべしと大盡人拂ひして、扨山瀨どうであつた。

聽きて興あるやう嘘も少々加味して、下坐敷の薄闇に才子佳人を說くの條を逐一辨ずれば、大盡膝の進むを覺えず。そんな事と知りせば立聽してくれたものをと切りに無念がりぬ。其につけても才藏といふ女はいはうやうなき怪物かな。我從來千百度も女に出會うて、曾て不覺を取るといふ事無かりし。これ我威光か、金力か知らねど、兎に角眼指せし女の自由にならざるは、主ある女か、人の娘か、これはさもあるべき理なれども、賣物ならば男嫌ひで

あれ、振自慢であれ、葛城餘五郎と名乗りかけてぐつと睨めば、ばたり〳〵と將棋倒しにして、花柳の街を行くこと、鐵の草鞋穿きて草原を馳廻るがごとし。

いかな粹でも通でも、濡事師でも我と聞く時は、黄金無垢の業平が來たわ、堪らぬと帶引結めて遁去るほどの男なるに、少敵と侮りて此度の不覺。これ一代の名折なり。

されども此示威は表向にて、内實あれほど心に稱ひたる女は、今に一人もあらざりし。一昨年京都めぐりせしに、彼地はいかさま美婦多く、いづれを見ても絹漉の肌膚、鴨河上水の寒晒、玉の如しとは蓋し彼等をいふなるべし。

その藝子といふ奴、美の美天人の妹分かと想ふほどのにても、金次第にて踏でも蹋でもよい事に定まりたれば、餘り正札過ぎて、勸工場の買物同然にて趣無く、かくては、天人でも菩薩でも心意氣が知れて、移香もどうやら錢の臭がするやうにて、嬉しからぬと念ひし所爲か、どれを見ても護謨製の女人形腹を押せばぴいと啼くだけの器械にて、色が白うて目鼻立がぱちりとして、姿と聲が優しいだけの沙汰にて、外に何もあるにはあらず、と京女蒟は雛の面も一向嫌ひになりぬ。

其とは事異りて江戸の婦女の好さ。しげ〳〵顏を視れば面道具の揃うて、繪に畫きたしと思ふはなく、眼の好きは鼻ひしやげ、眉が好ければ口狀しほらしからず。干潟の髮際あれば亂杭の齒行あり。第一色の黑さは我見ても氣の毒なるに、肌理疎きことは柚の皮を張たるごとく、鼻翼の邊には面皰のあとの脂に埋れて黑きなど、故障あらざる顏とてはなけれど、出額は出額にて可愛く、垂眼は垂眼なりに愛嬌ありて、萬更捨てたものゝあらざるは、心意氣に名物の旨い處があればなり。

かの才藏と云奴意氣に一節ありて容顏も凡ならず。見るほどの男の思ひ惱むべき骨格。柳橋の藝者でござる、と日本中引廻しても鼻の曲らぬ女なり。かほどの珍品を名も得知れぬ痩男の玩弄にさせ置かむは、言効無さの限りといふべし。

かくいふ餘五郎が土藏には、世界に又と無き寶の數在りながら、此品一箇缺けて寢覺の心懸りとなりては、不自由せぬ爲の此富も所爲無き事なり、と箸を逆手に膳を拍て、執心面色に見はれぬ。

山瀨もこれほどの發憤方に驚きて、さほどの御志ならば、高の知れたる猫一匹いかにともなるべし。まづ其妙計を御聞かせ下されといへば、大盡聲を潛め、これ頗る反間苦肉の謀計なるが、足下の暱妓に雛助と云ものあるよし、と眞顏に切出されて山瀨頭を搔き、暱妓といふ譯にはあらねど、ちとばかり。些ばかりにては計大いに妙ならず。遠慮無くいはれよ。其女に大事を賴みて氣遣ひあらざるほど

の御中か、と念をおされて山瀬も挨拶に當惑せしが、まづ此方の思慮にては、いかなる大事か知らねど、大方の事は引請け可申きかと答ふれば、なほ種々に念を推して、山瀬が言葉の中に、啞と深き中に相違なき處を見屆けたる上にて、詭計をしか〳〵と語り出せば、一々聽きてなるほどの頷き、或ひは首尾好く參るか知らねど、格別新手にもあらざれば、十全の上策とは申難し。

相手は金氣無き奴なれば、此方を片附けむに何の事はなかるべきも、本尊の女があの代物ゆゑ、と頻に首を拈れど大盡は遁れ爲濟まし顏にて、才藏いかなる情知といへども、一方には男に退かれ、一方には金と義理とに逼られて、厚き氷も火上に解くべし。古來より此手にて行かぬ女無しと、獨斷にして勇立ち、手函の中より軍用金攫出して、當坐の入費、之を持つて早く〳〵。

大盡の計どうやら妙ならず思へど、いかに成行くか我も面白さに、然らばと請込みて直樣車を飛ばし、柳橋なる雛助方に來て見れば、昨夜の徹夜、酒と疲勞に虐まれ、朝湯に入りければ身は綿のごとくなりて、小坐敷に炬燵して正躰なく寢入りたるを、且那樣の御入來と母親の驅込みて、抱起せども現にて又手枕に仆れぬ。

母親持餘して此始末といへば、構ふな〳〵と山瀬は其坐敷に入來りて、やう〳〵眼を覺まさすれば、夢ではないか、珍しやと、嬉々手水つかひに行きしが、頓て衣裳をあらためで入來り、炬燵に蹲まる男の帽子を引取り、半座を分けたるやうに寄添ひて、此頃の遠々しさを怨じかくれば、まづ此方からいひたき事ありと葛城が才藏に執心の次第を語りて、此念は何ありとも霽らさではおかじとの決心にて、此方結ぶの神に賴まれたるが、爰に一つの詭計ありて、其には其方を味方に附けたさに來れる男なり。

詭計といふは畢竟菊住との中を裂きて、金と義理との板挿みにせむとの殺生なるが、かの中を裂かむは容易の仕事にあらざれど、一人腕ある藝者を見立て、萬事を明かして宜しく之に含め、やいの〳〵で菊住へ持懸け、それから大熱々に上せて見せて、蜘楊枝で赤い顏して暮らせるほど男に仕送らせる寸法。此金は葛城の手許より仕拂ふべし。

菊住今も才藏の情には預かれど、あの氣象の女なれば金には緣無く、不自由勝は知れたる事なり。其虛に直入り、陽に實意を見せて金錢で空隙なく裏打せば、男心の動き易く、鼻に着たる才藏を捨てゝ、新出來の重寶なるに乘換る氣になるは眼に見えたり。其時才藏の事なれば、心に男の不實を恨むとも、女女敷事はよも爲じ。抵抗の意地を張りて、男めに草履取らせて此報怨をせむ事を念ふべし。處を大盡横鎗に仕留めむ手筈、甘く行けばお慰みなり。

扨此狂言の立女形には、菊住の色になる奴なるが、相隱

の心當りは無いかと問はれて、雛助進まぬ顏色、あるには誂向の女あれど、此狂言は殺生過ぎたれば、外に最少し手柔かなる思附のありさうなもの。いふは可笑けれど何處の誰が貴下と何屋にて睦ましさうに話して居たなどゝ聞く時は、しやくりと知りながら胸穩まらず、お顏を見ると口惜くなるは惚れた中の情なるを、いかに御主人の頼なればとて、其樣な苛たらしい事はせぬものでござんす。

別けて佛性のこの雛助は、話を聞たばかりで癪が起る。今にも才藏樣に會うて此次第を注進して、喜ぶ顏が見たいといへば、山瀨は冷笑ひ、いふな〳〵。子まである身の山瀨を墮落して、我女房には罪とも殺生とも思はぬか。これしきの事が苛たらしうては鰌汁も食へぬ理、隨分牛も豚も參る口から、殊勝い言を承まはるものかな。其方も聞傳りに錢に驚きて、氣味のわるい蟲が二百文ばかりと笑ひ草になる仲間なり。一度や二度は人の男を横奪して、腕があるといはれし覺えの身に、これほどの事は朝飯前と見て取ての頼みなり。

首尾好くゆけば褒美の品でも現金でも望み次第。且は我の手柄にもなる事なれば、義理と思つてやつてくれ、と洒落らしからぬ樣子に女もやう〳〵納得して、肝心の立者に誂向とは誰と聞けば、此地に人の知れる升屋の小〻、菊住には疾からホの字、此女ならば身錢を切りても働くべし。

## （四）心配筋

葛城大盡は何も知らぬ顏にて才藏を揚詰に、あつさりと飲みて否な眼色もせず。山瀨に口說かせし事は一時の酒興のやうに見せければ、かうした座敷の勤めよく、第一爲になる客筋と才藏も疎かならず待なせば、いよ〳〵御意に召して御側を離さず、願はざる諸品まで纏頭の多さ。今晩はと十年來何萬人といふ客に會ひしに、これほどの旦那はなかりし。

但憂きことは此座敷に囚はれて、菊住に逢瀨の自由ならず、二つ好き事は無きもの、と酒の中にも思出して、逢はむとならば何時でも首尾はなるべき自墮落の家業でありながら、苦界とは此處ぞ、と胸のもやもやは絶えざるに、一夜大盡雜話の中に、不圖熱海の湯治の事を言出して、この頃の餘間を幸ひに四五日遊びに、明日から行て見る氣は無いかとあるに、湯治場は轉ばぬ藝者の伴れられ所、うるさきことをいはれて否な思ひして、御機嫌を損ふが結極と見えてあれど、尋常ならぬ贔屓の旦那とおもへば、これほどの嬉さは無いやうに勇みて、是非に隨行を願へば、大盡至極滿足して、翌朝隨行二人に才藏を加へ、四人の同勢新橋の停車場に入れば、見る物無さに倦飽める待合の人々、これはと眼の覺めたらむ心地して、瞬きもせで視め入りぬ。此

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com